

いま「協同」を問う'96全国集会

生命・労働・地域の再生 21世紀の協同へ——東北からの発信

11月の全国集会へむけて、地元での実行委員会の動きや地域のネットワークの広がりを、この紙面を通してお伝えしていきます

文化が呼びおこす「生命・労働・地域の再生」

—井上ひさし講演と文化分科会への期待—

菅野 正純 (協同総合研究所)

—「この土地できみがする本当の勉強、それがこの岩手をイーハトーボという名の理想郷にするんだよ」
—「これからの農民は自分の手で音楽をつくり演劇をつくるんです」「自分たちの生活のなかから、自分たちのための、都会人がびっくりして舌を巻くような音楽と演劇をつくり出せば、自信も湧きます」
—「いいですか、どの村もそれぞれ『中心』になるんです。そしてそれらの無数の中心がたがいに交流し合い……」(井上ひさし『イーハトーボの劇列車』新潮文庫における「宮沢賢治」のセリフから)

9月9日、児演協の荒木昭夫さんに準備していただき、福島県郡山市で協同集会の文化分科会の打ち合わせを行いました。郡山で開いたのは、³会津旋風、とも言うべき文化運動の新しい精力的な実践が展開されているとお聞きしたからです。

当日は、その会津から、三島町交流センター「山びこ」学芸員の五十嵐政人さん、昭和村教育委員会・社会教育係長の舟木幸一さん、喜多方プラザ文化センター・舞台研究会「うらかた」の薄崇雄さん、「劇団風の子」東北事務所の澤田修さんにお越しいただき、長野子どもと文化研究会の吉村省吾さん、センター事業団郡山出張所長の城戸喜久雄さん、シーアンドシーの飯島信吾さん、および荒木さんと私が参加して、交流しました。

会津からの³カルチャーショック、

当日の会津からのお話は、³根なし、人間の多い巨大都市東京で生活し活動する私にとって、文字通りの³カルチャーショック、でした。

一つには、生活文化から工芸文化、芸術文化にわたる、広い意味での文化が、地域の中でしっか

り根づき、継承・発展させられていることです。ほんとうの意味での「豊かな生活」とは何か、それは人間の顔が見える「地域」においてこそ可能なのではないかという、羨望を伴った発見でした。

第2に、過疎化や産業空洞化という厳しい状況の中で、それを乗り越えるような動きが文化を起動力として始まっている、という点でした。「人間の生き方」にまで降りたちながら、文化が地域づくり・仕事おこしをリードしている、という東北に内在する実践に出会えたことは喜びでした。

工芸から地域をプロモート——三島町

三島町交流センターは、企画展示を行う「博物館」を中心に、200人収容のイベントホール、および食事体験や昔語り、伝統行事を再現する民家を擬した木造の本組などから成る施設です。五十嵐さんは、「地域のプロモーター」を自認する博物館の学芸員です。ここでの博物館は、「売れる展示」を行って、工芸を現代に継承発展させながら、都市に積極的に情報を発信する拠点にもなっ

ています。これに刺激を受けて都市からも工芸家
が移り住み、日本クラフト展でグランプリを獲得
した人も現われています。

昭和村の「からむし織」「織姫制度」

昭和村の舟木さんからは、「からむし織」の伝
統を絶やさないために、一昨年から設けた「織姫
制度」のお話を伺いました。「からむし」とは、
麻に似ているが麻よりも細い上質の糸がとれる、
イラクサ科の多年草。人口2200人の昭和村では、
この「織姫」を全国から募集したところ、2年間
で100名を超える応募があり、17名が選ばれて
織りを体験。さらにこのうち10名が引き続いて村
で生きることを決めました。ある女性は、「栽培
から皮はぎ、糸つむぎ、織り、すべて自分の手で
やることに、すごく魅力を感じた」「これからは
高度な技術を学んできちんとした反物を織れるよ
うになりたい。それからデザインを工夫して、若
い人に受けるような物に手を伸ばしていこうと思
っています」と語っています。

喜多方プラザ文化センターと「うらかた」

喜多方では、市内に点在する蔵のイメージをデ
ザイン化した1176席のせせらぎホールなどを備え
た喜多方プラザ文化センターが文化の拠点となっ
ています。ここでは恒例の室内楽シリーズ「ザ・
蔵シック」などの公演とともに、演劇、オペラ、
ダンスなど、地元の人々が企画から公演までを担
う「自主創造型事業」が推進され、自ら演劇を演
じるこども劇場も生まれています。

センターの開設とともに、舞台の照明や音響を
ボランティアを含めた地元の人々自身で担えるよ
うにと生み出されたのが、舞台研究会「うらかた」
です。同研究会の薄さんは、「中央のしがらみか
ら抜けて、地方自身が文化を発信するためにも、
地元の制作能力を高めることが必要」と、地域で
舞台技術者を養成することの意味を強調します。

興味深かったのは、喜多方にホールができ、福
島県内はもちろん、東京からも人が集まって来る
ようになってから、喜多方ラーメンが近年とくに
有名になった、というお話でした。これを薄さん
は、「文化は経済に先行する」「劇団の誘致は工

場誘致に勝るとも劣らない」とまとめられまし
た。

新しい芸術家像示す劇団風の子の生き方

こうした会津の文化ネットワークの結び目とな
っているのが、実は「劇団風の子」東北事務所の
澤田さんだとは、後で荒木さんから伺ったところ
です。劇団風の子では、地域に密着して、保育園
から小中学生、高校生まで、地域の子どもたちに、
発達に応じた芝居を見てもらおうと、82年から地
域拠点づくりを始めました。東北では、「地方の
子どもたちにこそ生の演劇を」と、拠点を過密の
仙台にはなく、喜多方に構えて、喜多方の竹細
工製品を小道具に創作劇の巡回公演を行ったり、
アマチュアの舞台を指導するなど、地方の文化を
支えてきました。

「3分の1芝居、3分の1ワークショップ（演
劇指導）、3分の1その他の仕事」というのも、
新しい芸術家集団の姿として、たいへん魅力的に
お聞きしました。ちなみに荒木さんによると、澤田
さんのつくるギョウザは天下一品とのことでした。

井上ひさし講演がびったりと集会の核心に

協同集会の文化分科会では、その他、北海道の
「子ども舞台祭典」の取り組みや、遠野の「語り
部」、ユニークな映画館「山形フォーラム」など
の報告を予定しています。それにしても、今回の
会津の人々との出会いは、今年の全国協同集会を
象徴するような問題を投げかけてくれました。今
回の協同集会のコンセプトは、「生命・労働・地
域の再生/21世紀の協同へ——東北からの発信」
となるのではないかと考えています。

そうした折から、協同集会の記念講演をお引き
受けいただいた、井上ひさしさんの上記の『イー
ハトーボの劇列車』、および『宮澤賢治に聞く』（文
芸春秋社）を読みました。「生活の芸術化」を通
じて「どうか人びとが明るく生きてくれますよう
に」という賢治の祈り（『宮澤賢治に聞く』）は、
まさに今日の会津の人々の実践にもつながってい
るものと感じました。

井上さんは、自ら主催されている「遅筆堂文庫
・生活者大学校」で、「この小さな地球。水惑星